

国際教育研究フォーラム

第 98 号

2023年 8月

国際教育研究所

目次		頁
子どもの貧困対策をめぐる主要国の動向	小山 悦司	1
外国語を学ぶ意義について考えてみた	浅野 純一	2 ~ 5
米国訪日学生研修団に対する国際交流科学イベントの報告	岡崎 則武	6 ~ 13
編集後記		13

子どもの貧困対策をめぐる主要国の動向

国際教育研究所所長 小山 悦司

厚生労働省が7月4日に公表した「国民生活基礎調査」によると、2021年の相対的貧困率は15.4%であった。経済協力開発機構（OECD）が公表する各国の貧困率（Poverty rate）の最新値でみると、日本は米国（15.1%）、韓国（15.3%）に抜かれてOECD加盟国の中でも最悪のレベルに位置している。また、所得水準などに照らして貧困の状態にある18歳未満の割合を示す子どもの相対的貧困率は、2021年に11.5%となっている。実に子ども8.7人に1人が困窮にあえぐ状況にあり、その数は国内でおよそ250万人前後と推定される。

こうした子どもの貧困は、見た目は「普通」に見える子どもが多いことから、外部からは見えにくいという特徴がある。貧困状態にある子どもの生活においては、1) 給食がない夏休み明けには体重が減っている、2) 欠食やインスタント食品による栄養の偏り、3) 用具が買えないために部活動に参加できない、4) 服や靴を買ってもらえない等の傾向がみられる。

海外に目を移すと、子どもの貧困対策に各国はさまざまな取り組みを行っている。まず英国は、97年から10年間でひとり親世帯の子どもの貧困率を49%から22%へと低下させた。その要因の一つは、貧困に対する法律に数値的目標を設定し、対策の進行状況を毎年国会にて報告して、3年ごとの戦略見直しを義務付けたことであり、日本でも参考にすべきである。

つぎにドイツでは、子どもに関する社会保障として18歳になるまで、あるいは高等教育などの修了までは全世帯に子ども手当を給付し、教育に関する物品の実費支給、出生から1年間支給される育児手当などの支援金をひとり親世帯に給付し成果を挙げている。

そして韓国では、映画『パラサイト 半地下の人々』がアカデミー賞の最多4部門を受賞するなど、韓国の厳しい貧困の実態が社会の注目を浴びてきた。近年、韓国の貧困率は継続して改善傾向にある。これは、日本の生活保護制度にあたる「国民基礎生活保障制度」を利用しやすくして、最低賃金を大幅に引き上げるなどの再分配政策に取り組んだ成果といえる。

一方日本では、「子どもの貧困対策に関する法律」が成立して10年。2023年4月には、こども基本法が施行され「こども家庭庁」が発足した。同庁は、行政の縦割りを排し、「こども政策」に一元的かつ迅速に取り組む司令塔としての役割が期待されている。子どもの目線を最重視した「こどもまんなか社会」の実現を目指す新省庁の真価が問われることになる。

外国語を学ぶ意義について考えてみた

岡山理科大学 基盤教育センター 浅野 純一

およそ外国語（英語以外の外国語、以下同じ）を学習する意義というのはなんだろう、さて？

異文化理解とよくいわれるが、それはその通りではあるが、具体的にどのようなシチュエーションを想定しているのだろうか。もちろん、外国語で日常会話だけでなく、仕事上のコミュニケーション、趣味のコミュニケーション、学術上の議論などができ、その言語でまとまった文章が書けるのは理想的である。しかしそのためには、相当の努力と時間を強いられる。

筆者は、大学の教員となって以来三十余年間、いわゆる第二外国語（本学では初修外国語）の中国語を主として教えてきた。筆者の学生時分、就職して間なしの頃には、多くの大学で第二外国語は週二コマ、教養課程のほぼ二年間必修として履修しなければならず、辞書を片手に一般的な文章は読める程度の学力は保障されていた（はずだ）。留年の大きな理由ともなっていたが。

しかし、いわゆる「大綱化」以降、多くの大学で徐々に必修第二外国語の時間数が減らされた。必修を外して選択科目にする大学も多い。本学もその例に漏れず、先の改組では（獣医学部を除いて）必修でこそあるが週1コマ、一学期分のみと半減した（本学では必修英語も時間数にして従来の三分の一となった）。初級の教科書の多くは年間三十コマを基準に基本的な文法事項を一通り学べるように編集されているので、多くの学生は概ねその半分以上を学習するだけで第二外国語の授業を終える。ことのよし悪しは別にしてこれが（少なくとも本学の）現状である。

さて、そうした条件のもとで外国語を学習する意義というのを考えてみよう。といっても、どんな知識であれ、それがフェイクでないかぎり多に越したことはない、と言えそれまでではある。が、それでは身も蓋もない。

まず第一に、文字通り入門として。本格的な外国語学習のきっかけになればそれに越したことはない。

次に、異文化理解、というか自国（既知の）文化の相対化、なのだが、初級レベルでは「文化」と大上段に構えた言い方は無理があるかもしれない。しかし初級レベルの文法・語彙であってもある事象の表現の仕方が言語によって異なること、二つの言語は単語レベ

ルでも文のレベルでも一対一の対応をしているわけではない、という程度のことは認識できる。学生たちはすでに英語を何年にもわたって学んできているはずだが、なぜかすべての言語は一対一の対応があり、一義的な翻訳が（したがって試験の一義的な正解が）できるものと思込んでいるように見える。それでは世界の多様性、多義性は理解できない。翻訳機というブラックボックスを通すこととは違う次元の営みなのである。

言語によって、世界の認識の仕方は大きく、あるいは微妙に違うということの一端を垣間見てほしいのだ。同じ現象を、能動で表現するか受動で表現するかで微妙な、場合によっては決定的な差が生じる。新たな母語表現を獲得できることもある。たとえば一月二月という月の名称、彼女という三人称の性別、梅雨の最中の七夕、寒の入りより早い「初春」、といえ、なんで？と思う人は多いだろう。かつてSDGsがらみで、日本語の「もったいない」が、他言語に訳せない概念なので、「MOTTAINAI」として（ちょっとだけ）世界的に流行したという話題を覚えている方もおられるだろう。

もっと卑近な例でいえば、来日した外国人観光客が一言なりとも日本語「こんにちは」「ありがとう」etcを発話するだけで、われわれはいささかの親近感を抱く。逆の立場でも言えることなのだ。

あるいは、英語のエービーシーが、フランス語ではアーベーシー、ドイツ語はアーベーツェーとなる、それが英語の不規則な発音(cat と city とか) に反映されている、キュロットスカートって何語？など既習英語に改めて興味を抱かせる契機にもなろう。語源を共有する単語も多いし。

異文化理解 — 既知の文化の相対化 — の入り口なのだ。

あるときある大学の副学長先生とお話したことを思い出した。化学のご専攻であった。その先生がおっしゃるには、第二外国語は習った記憶があるが卒業後には何も覚えていない、時間の無駄である、異文化理解というならたとえば世界遺産について学ぶとか、その国の典型的な行事をビデオで見るとか、のほうがよく異文化を理解しうる、と。身につかない勉強よりも専門の方に時間を割きたい、ということなのだろう。語学教師よりも旅行社の社員に授業を担当してもらった方がよいようなはなしで、これまた身も蓋もないが、そういう考え方もあるだろう。

個人的な体験で恐縮だけれど、筆者は学生時分最初ドイツ語を履修して挫折し、二回生から中国語に鞍替えして結果中国語の教師になった。学部進学以後、ドイツ語に触れることはほぼなかったけれど、それが無駄だったかというところではなかった。特にドイツ語の綴りをちゃんと発音できるようになっていたのは、かなり役に立った。近代の中国語の中にもドイツ語由来の外来語はときどきあってそれを類推するのに役立ったし、専門を離れた読書でもむろんこれは役に立った。少しばかり齧ったスペイン語も話のネタ（JAPAN

とニッポン)に役立った。

単なるトリビアとしての知識ではなく、ある程度体系化された — 初級語学のような — 知識は、どこでどんなふうに役立つかわからないものだと、しみじみ思う。レヴィ・ストロースの言うブリコラージュ — かならずしもうまく説明できないが単なる寄せ集めではない知識の体系 — なのであろう。知ってりゃ何か (ひよっとしたら人生の最重要事) の役に立つ (かもしれない) 知識 (とその位置付け=理解) が、教養というものなのだ、たぶん。

中国語とハングル (本学での科目名) はお隣の国の言葉で、人の交流も多いことを鑑みれば東洋平和のためにも、まんいち「有事」の折には敵を知り己を知るためにも (!) ぜひ学んでほしいものである。

ハングルは、文法的にも漢語由来の単語の多さをみても日本語に近いので、学びやすいようだ。K ポップファンも多く、本学でも中国語について履修者が多い。ハングル文字の読み方だけでも覚えれば、たとえ会話ができなくともソウルの街歩きもできそうだ。ついでに、漢語由来の単語をもとの漢字で覚えればより覚えやすいだろう。たとえば「アンニョンハセヨ」の「アンニョン」は「安寧」であると気づくと、ずっと身近に感じられるのではなからうか。

さて中国語である。発音が難しいという世評がもっぱらだが、そのじつ発音自体はそう難しくない。英語に比べてもずっとやさしい。文法も単語レベルでの変化・活用がないので初級ではわりと単純だ。しかし、漢字が表音文字でないため、文字と発音が結びつかないのだ。しかも中途半端に漢字を知っているので、文字を見るだけで中途半端に意味がわかってしまう。中国語にも「拼音 (ピンイン)」というローマ字による発音記号があって、たとえば你好であれば、**nihao** (ニハオ、ではなくニイハオ) と表記する。いくつかの例外と、日本語のタ行サ行などはその子音がまちまちであることなどを理解すれば、概ね標準的なローマ字の発音でそれなりの中国語音が発話できる。しかし、やはり文字と発音をリンクさせることができない。しかも声調 (音の高低、日本語でいえば橋と箸の違いのようなもの) もある。(詳細は拙稿「中国語教授について覚書 (発音編)」『岡山理科大学教育実践研究』6, 2022(<https://ous.repo.nii.ac.jp/records/3158>)を参照)

多くの方は、母語であれ英語であれ、文章を黙読するときでさえ脳内で音読しているだろう。にもかかわらず、日本人は中国語でそれができない。日本人以外の諸国民は、漢字より先にピンインで喋り言葉としての中国語を学ぶ。中国や台湾の中国語学校では、日本人の学生は読解力は非常に優れているが、会話力は大きく劣るそうだが、さもありません。

「同文」であるが故の悲劇である。

さてではどうするか、初級レベルの中国語をどうするか。以下私見である。

まずはピンインの発音をそれなりにきちんとできるようにすること。これは経験上、大部分の学生がそこそこできるようになる。北京でも台北でもたいていの公共の表示にはピンインが表記してある。音だけでも模することができれば、漢字に変換できなくとも一定のコミュニケーションができる可能性は、ある。機器の利用もしやすくなる。

次に簡体字と呼ばれる略字と日本漢字（新字体）をリンクさせて覚えることである。奇しくも 1950 年前後にほぼ時を同じくして日中両国で煩瑣な漢字を簡略化した。たとえば「國」の字は、両国とも古くから私的に使われていた「国」を採用した。「會」も同じ「会」を採用した。ところが、「譯」は日本では「訳」中国では「译」とした。「轉」は「転」と「转」に、「豊」は「豊」と「丰」と簡略化された。旧字体をそのまま日中両国が用いていればかつて東アジアの「同文」はそのまま生きていたのだが、現在では文字を見ただけでは、したがって筆談でもなかなか通じなくなってしまう。たとえば

刘老师 吃 汤面。

邓泽东 听 交响乐队。

赵总理 讲 中国的传统。

これの意味を取ることができるだろうか。

しかし、この簡体字と新字体が頭の中で紐づいておれば（さらにいえば旧字体（繁体字）も一緒にリンクさせれば台湾や香港でも）、かなりの意思疎通は可能になる。われわれ日本人は常用漢字 2136 字を知っている（はずだ）。これにあと 60 字ほどの漢字を覚えれば、まあ、事足りる。上の例を新字体で書き直せばこうなる。括弧内は旧字体。

劉老師 喫 湯麵。 (劉老師 喫 湯麵)

鄧澤東 聽 交響樂隊。 (鄧澤東 聽 交響樂隊)

趙總理 講 中國的傳統。(趙總理 講 中國的傳統)

主語が人名であり、文法は主語＋動詞＋目的語であることを知れば、概ね意味はわかるだろう。

漢字を知っている、というわれわれの利点は活かすべきである。しかもこれは、電子辞書や翻訳エンジンなどを利用する際にも、手書き入力もできるようになるので極めて便利な知識なのである。

ピンインと簡体字、この二つを（乖離したままであっても）しっかりと覚えさせるのが異文化理解のための初級中国語の役割ではないかと思考するのである。

米国訪日学生研修団に対する国際交流科学イベントの報告

岡山理科大学 科学ボランティアセンターコーディネーター 岡崎 則武

はじめに

岡山理科大学科学ボランティアセンター [通称: 科ボラ] (参考文献1) では、2010年6月より年に一度、大学構内で国際交流科学イベントを開催している。コロナ禍に入る前の2019年まで10回にわたり、本学に来学した米国やブラジルの大学生の研修団等を科学実験等のパフォーマンスや学生交流でもてなしてきた。

2020年からのコロナ禍により3年間、その訪問は途絶えてしまったが、2023年7月に米国オハイオ州のフィンドリー大学とライト大学より学生18名が再び訪問することとなり、在職2年目の科学ボランティアセンターコーディネーターである筆者が会の企画運営と学生の指導に当たった。本稿では、その取り組みについて紹介する。

1. 前途多難な幕開け

筆者は「国際教育研究フォーラム」第93号「仮説実験授業を海外に広めるための取り組み」(参考文献2)でも紹介したとおり、海外においてさまざまな科学実験や授業、学会発表を行ってきた。その経歴を買われ、科学ボランティアセンター長の高原周一教授にこのイベントの責任者を任された。

直後に、驚くべきことが発覚する。このイベントが3年間中止となっていたことはわかっていたが、それまでに積み上げてきたはずの10年分の文書等が全く存在しなかったのだ。前任者(退職したコーディネーター)によると、ハードディスクの故障によりすべてのデータが失われたということだった。残っていたのは少しの写真と動画のみで、前任者も3年も前のことなので運営について忘れてしまったという。

ないものは仕方ない。むしろ、全く新しく始めるつもりで挑戦することにした。

2. 参加学生の確保

科ボラは、意欲的な学生が集う場所である。最近の学生の気質か、あるいはコロナ禍による自粛ムードのせいなのか、声をかけてもらうなどして背中を押してもらわないと動き出せない学生も少なくないが、それでも全部で50人ほどの「科ボラ学生スタッフ会」は人を楽

しませることを自らの喜びとする気概に溢れた集団であることは間違いない。

ただし、これは前任者に言われたことだが「国際交流イベントは別」ということだった。英語に苦手意識を持つ学生や、子どもではなく外国人の同世代を相手にすることに躊躇する学生が多く、なかなか必要な人数を集めるのが難しいということだった。

今回の来日大学生は18人。こちら側もそれを少し上回る20人程度の学生を集めたい。6月28日の交流イベントから逆算し、2ヶ月前にはLINEオープンチャット（オプチャ）を開設した。

科ボラのLINEで参加者を募るほか、個人的に声をかけ続けてみたが、応じてくれたのは2人のみだった。本学グローバルセンターの子原さんにも相談して、グローバルボランティア（グロボラ）の学生さんにもスタッフとして加わってもらった。ここまでで7人だった。

LINEオープンチャット開設の2週間後、奇跡が起こる。

「科学・工作ボランティア入門」という科目の中で、5分間だけ時間を割いてもらい、勧誘のためのプレゼンテーションを行った。科ボラの学生は一人もいないクラスであった。

私のプレゼンテーションは強烈である。前職の高校教員時代に学校紹介プレゼンを担当していたが、終了後、中学生の保護者のお父さんが目に涙を浮かべて手を差し伸べてきた。そのような、心を揺さぶる提示の仕方。全く違う視点から世界を見せるのが私の信条だ。

奇跡。50人ほどのクラスの中で参加希望者は15人。一気に目標に達することができた。そして、オプチャで自己紹介とともにイベントのアイデアを提案してもらっていった。

3. 「やる気」の問題

「数」は確保できた。しかし、「質（意欲）」はどうか。たった5分のプレゼンに瞬間的に感化されただけで参加した学生は、モチベーションの維持が困難である。

そこで、その中から能動的に動いてくれる中心メンバーを募集した。5人が応募してくれ、特にその中の2人は最終的にこのイベント成功の立役者となってくれた。また、科ボラオリジナルメンバーである2人は非常に優秀であることがわかっていたので心配していなかったが、他のイベントに忙殺されていたため直前まで準備には参加させないでおいた。

振り返ってみると、よく動いてくれたのは全体の2割で、残りの8割はとりあえず参加したといってよい。これは「パレートの法則」（例えば、働きアリのうちよく働く2割のアリが8割の食料を集めてくる）にも通じるものがあった。

ただし、それは「経験前」の話である。交流会に参加し、自分の予想を超える体験をすれば、その残りの8割にも変化があるはずである。それは最後の参加者の感想により読み取ることになろう。

4. 企画の立案

科ボラ学生中心の交流イベントであれば、科ボラ色を全面に打ち出して会を運営することができるし、それが望ましいと思う。しかし、今回は科ボラ色が極めて薄いメンバー構成となった。

理想を言えば、科学ショーを新しく英訳し、英語が苦手でも挑戦してみることに意味があると思う。しかし、今回はそれについては断念し、すでに英語でのショーとして実績があり、私自身も海外で実施したことのある簡易真空実験 (ShupoShupo) (しゅぽ↑しゅぽ↓) と、世界一投げやりの楽器「Bungee Chime」(バンジーチャイム) ～以上は「国際教育研究フォーラム」93号(参考文献2)を参照のこと～を科ボラオリジナルメンバーにより実施することにし、それ以外はむしろ通常ではやらないような企画をやることにした。

まずはブレインストーミング。オプチャ上で学生に「自由に考えて」と投げかけ、案を募った。しかし、トランプやカードゲームなど、ありきたりなものがほとんどだった。そこで、「アメリカに帰ってから、『Japan でこんな game やったぜ。cool だろ』と周りに言いふらしたくなるもの」というハードルを設けた。だがそれはむしろ逆効果で、案がないところにそれ以上の案は出てこなかった。

そこで、私から日本風なアイデアを提供した。

まず採用を決定したのが「ガチャガチャ(カプセルトイ)によるバディ決定」である。中古のガチャガチャマシンを購入した。参加学生に300円ずつ渡して「プレゼント」を買ってきてもらう。最近のガチャガチャは種類豊富で和風のものも多くあり、海外から来た観光客にも人気がある。カプセルに呼び名(例えば「Nori」)と自己紹介を書いた紙を入れて、米国の学生に引いてもらう。そして「Nori!」と呼んでもらうと、Noriが出ていき、自己紹介とプレゼントの説明をして渡す。こうして、この会での「バディ」(二人組)を決定する。



図1, 図2 訪日学生がガチャガチャを引き、ペア(バディ)が決まったら自己紹介

それから、英語についての苦手意識を少しでも減らそうと考え、「英語ミニ講習会」を実施(5人参加)し、さらに「実験や当日の会話で使いそうなカンニングペーパー(英単語集)」を作った。グローバルセンターのダニエルさんはそれに「as in」という、「それを読むと日本

語っぽく聞こえる」つづりを加えてくれた。例えば、「空っぽ」は「calapo」という具合である。日本人が英語をしゃべるだけでなく、米国人も日本語をしゃべって双方向で会話ができると面白いと考えた。(が、生かされた場面はほとんどなかった・・・)

2週間前の全体打ち合わせ会でこれらについて説明し、あとはオブチャで情報を流していた。

5. 会食中のイベント企画について

会食はビュッフェ形式(皿を持って取りに行く)で、子原さんより「あまりイベントを詰め込みすぎると食べる時間がなくなる」というアドバイスをいただいたため、全部で1時間を取り、最初の20分ほどは食事とバディ、テーブルでの会話を楽しむことにした。

テーブルは長テーブルを2つくっつけて6人掛けとし、バディでどこに座ってもいいことにした。このことで、仲間のくつろぎの中で和気あいあいと進められると思ったからである。またアトラクションも、その最中でもビュッフェにお替りを取りに行けるような気軽なものを1つと、食事が終わってみんなで注目してやるもの1つの計2つを考えることにした。

今回の訪日学生たちは加計学園の5校ほどを回る計画で、すでに各校でのアトラクションは決まっていた。それらは「夏まつり」「武道」「水墨画」「畳を使った作品」「制服コスプレ」「浴衣踊り体験」「手巻き寿司」「サーフィン」などである。

これらと被らず、しかも日本的なものとして私たちが発案したのが【二人羽織】と【寿司タワー】だ。

二人羽織は、バディのうち、同性で事前に参加不可表明のなかった人のみ対象にすることにした。アトラクションチームのメイン2人が実際にいろいろ試してみて、冷やし中華やプリンを使うことにした。

寿司タワーというのは、たまたまテレビのバラエティ番組でやっていたもので、寿司イラストの書かれた「ジェンガ」を、箸で1本ずつクロスして積み上げていくというゲームである。プラスチック箸でのつかみにくさなどいろいろ試して、子ども用のトレーニング箸や箸の先にビニール管をつけて滑りにくくするなど工夫した。計算上は、一度に3組が、1分後に載せられた数で勝



図3 二人羽織



図4 寿司タワー

負するので全員ができるかと思ったが、実際には時間がなく2組のみとなった。

【資料 当日の流れ (計画)】

17:00	理大学生 会場集合完了、会場セッティング
17:30	米国団 会場着
17:30~17:40	ガチャガチャでバディを決定し、自己紹介。好きな場所へ並んで着席
17:40	オープニング科学ショー (ShupoShupo)
18:30	食事準備 (着席後) 高原先生ウェルカムスピーチ
18:40	アトラクション1 「二人羽織」
19:10	アトラクション2 「寿司タワー」
19:40	エンディング演奏会 (バンジーチャイム) 日本のコイン→パイプの長さ→♪「星に願いを」→ (アンコール) ♪「歓喜の歌」

6. オープニング実験〈Shupo Shupo〉について

〈ShupoShupo〉は、「仮説実験授業」(参考文献3)に学び、名古屋の「楽知ん(らくちん)研究所」(参考文献4)が開発した「大道仮説実験 しゅぽ↑しゅぽ↓」を英訳した非常に人気の高い一連の実験ショーである。身近なもので真空の概念とおもしろさを伝える。

実験は科ボラで実践経験のあるH君が行い、同じく科ボラのTさんが補助、iPadによる実験接写(プロジェクターで投影)した。

H君もかなり緊張したようで、だんだんと英語の部分がおぼつかなくなり、総合司会をしたBさん(英語も日本語もできる留学生)に読み上げをフォローしてもらった。

基本は前で実験を見せたが、キャンディーの袋やマシュマロを簡易真空ポンプで「しゅぽ



図5, 6 簡易真空実験〈ShupoShupo〉の様子1, 2



図7, 8 簡易真空実験〈ShupoShupo〉の様子3, 4

↑しゅぽ↓する実験はバディーごとに行ってもらい、非常に盛り上がった。

真空引きしたサランラップが巨大な音を立てて破裂する実験や、ボウル（半球）2つを向かい合わせにし真空にした球を両側から綱引きする「マグデブルグの実験」は熱狂的な反応があった。

7. 二人羽織と寿司タワーについて

順調に進んでいた交流会だったが、ここで誤算が生じた。ビュッフェで食事を取るのに時間がかかり、時間が非常に押してしまったのである。

元々、二人羽織はバディーより数組が行い、寿司タワーは全バディーが行うことになっていたが、どちらも時間不足のため短く行うことしかできなかった。それでも、非常にノリのよいアメリカ人学生がムシャムシャと麺をかき込んだり、プリンを大口で平らげる様子は異文化体験そのものだったようで、さかんに動画を撮影していた。また寿司タワーも2組しかできなかったが、接戦となり、会場は大いに沸いた。



図9 二人羽織は非常に注目を集めた

8. バンジーチャイムについて

「バンジーチャイム」も「しゅぽ↑しゅぽ↓」と同じく楽知ん研究所が開発したものである。音程にあった長さの真鍮（しんちゅう）製パイプを落とすことで、誰でも即席の演奏ができる優れものである。

当初の計画では、日本のコインを落としたときの音を比べて、5円玉（真鍮＝ブラス）の響きが良いこと（だからブラスバンド）や、長さによる音程の変化といった実験を経て、定番

である「星に願いを（25本で演奏）、さらにアンコールとしてデラックスバージョン「ベートーベン第九 歓喜の歌」（和音で126本で演奏）を締めとする予定だった。しかし、これも時間の関係で大幅にカットを余儀なくされ、科ボラのTさんが機転を利かせてショートカットし、全員が輪になってチャイムを床においたコンクリート板に放り投げながら回っていくやり方で感動的なフィナーレを迎えることができた。



図 10.11 バンジーチャイムで感動のフィナーレ！

9. 参加者（日本学生）の感想より

終了直後から、オプチャには日本側スタッフの感動の声が溢れた。

・始まる前はとても緊張していましたがいざ始まると本当に一瞬で、その一瞬がとても濃く、楽しく、貴重な体験になりました！英語がうまくできなくて悩む顔より、わからないなりにコミュニケーションをとる上で自然と笑顔でいることのほうが多くてまた一つ自分の中で成長できた気がします！最高の時間を本当にありがとうございました!!(A.S 君)

・英語力に自信がなく、正直不安な気持ちが感情の8割程を占めていましたが和やかな雰囲気の後押しされ全力で楽しむことが出来ました。「とりあえずやってみる精神」で積極的に交流することの大切さも学ぶ事ができ、異文化交流によって新たな刺激を受け、さらにはSNS まで交換して得るものが山ほどありました。会が終わる頃には緊張や不安など忘れて心から楽しめました。本当にありがとうございました。(Y.Y さん)



図 12 米国訪日学生研修団と参加した理大生全員

10. 今後の展望

科ボラの「訪日学生研修団国際交流イベント」を再発明する。

その目論見は成功に終わったように思う。参加した学生の多くが、自分の目の前で新しい世界の扉が開かれるのを体験した。積極的に関わったメンバーは、自分自身に大きな財産を

手に入れることができた。その中でも、科ボラに入ったばかりの W さんには、来年の交流イベントのプロデュースを依頼してあった。「来年、自分で運営するつもりで高い視点から会を見てほしい」と、視座を高く、視野を広く持つことを事前に求めている。

W さんは科ボラ初の経営学部の学生である。1 年かけて、科ボラのイベントを通し、「運営」や「マネジメント」を学び、次回の交流イベントを今年以上に素晴らしいものにしてもらいたいと願っている。そのとき、どれほどの成長を見せてくれるだろうか。とても楽しみだ。

今回の交流イベントには、グローバルセンターの子原さん、ダニエルさんの熱い応援や、グロボラの学生さんたち、さらに理大の英語スピーチ大会で優勝した経歴を持ち科ボラに入会してくれた Y さん、最高の総合司会を努めてくれた留学生の B さんらの多大な協力が不可欠であった。もちろん、科ボラの H 君、T さんなくしてこのイベントは成り立たなかった。最大の称賛と感謝を贈りたい。

自分から新しい世界の扉を開ける学生さんは本当に少ない。しかし、そういう人材を育てることは可能だと私は信じる。

この国際交流イベントが、その 1 つの可能性になってくれることを願ってやまない。

参考文献等

- (1) 科学ボランティアセンターの詳細については <http://ridai-svc.org> を参照のこと
- (2) 「国際教育研究フォーラム」93 号
<https://www.kake.ac.jp/iie/wp-content/uploads/forum-93.pdf>
- (3) 仮説実験授業については <https://www.kassetsu.org/> を参照のこと
- (4) NPO 法人楽知ん研究所については <https://luctin.org/> を参照のこと

【編集後記】

「国際教育研究フォーラム」第 98 号では小山悦司所長、浅野純一氏、岡崎則武氏の 3 編のエッセイを掲載しました。小山所長は 21 年の我が国の相対的貧困率が、米国、韓国に抜かれ、先進国で最悪の水準になり、貧困対策として発足した「こども家庭庁」の真価が問われると述べています。浅野氏は学習時間の減少した第二外国語を学ぶ意義を異文化理解の入口であるとして、具体的事例を挙げて述べています。また岡崎氏は岡山理科大学を訪問した米国訪日学生研修団との交流イベントを成功裏に納めた学生たちの活動記録を報告しています。

今回掲載しました 3 編は視点こそ異なりますが、我が国の教育の現状を踏まえた方向性等が示されています。その意味で、3 編とも興味を持って読んで頂けるものと確信しています。(T.A.)

編集・発行：国際教育研究所
〒710-0821 倉敷市川西町 11-30
加計国際学術交流センター内
TEL (086) 423-1611 (代)
URL : <https://www.kake.ac.jp/iie/>
e-mail : iie@edu.kake.ac.jp